直売所向け新規野菜の
栽培マニュアル

平成１９年８月

福井県農業試験場
園芸振興センター

目次

はじめに ---------- １
スイートコーン（ハウス早熟栽培）------- ２
ズッキーニ（ハウス半促成・抑制）------- ４
茎ブロッコリー（秋作）---------- ６
ミニチンゲンサイ ---------- ８
パプリカ（ハウス栽培）---------- ９
アスパラガス（ハウス栽培）----------１２
新規野菜の栽培のポイント ----------１６
新規野菜の防除 ----------１７

はじめに

県内では各地に農産物直売所が作られ、新鮮でおいしい農産物を通じた消費者との交流が行われています。また、県でもフードビジネスを推進するため、農産物直売所の拡充等による地産地消の促進を図っているところです。

農産物直売所に対する消費者のニーズは、農産物の新鮮さやおいしさだけでなく、安全・安心なもの、買いやすい価格、豊富な数量と品揃え、長い販売期間、生産者との顔の見える関係など多様です。これからの直売所の活性化と生産者の所得向上のためには、直売所の魅力向上や、リピーターを含めた顧客確保が重要と思われます。

そこで、当園芸振興センターでは、平成１６年から３年かけて、県内で取り組み事例の少ない新しい野菜や作型を試験栽培し、実際に直売所内で試験販売を行いました。その中から作りやすくて、売れ行きのよいもの、ある程度の期間、棚に並べられて直売所の特徴づけに有効と思われる６品目を絞り込み、それらの栽培のポイントを、直売所の生産者と関係者に広く知ってもらうため、マニュアルを作成しました。

より魅力的な直売所づくりの一助となることを願っております。

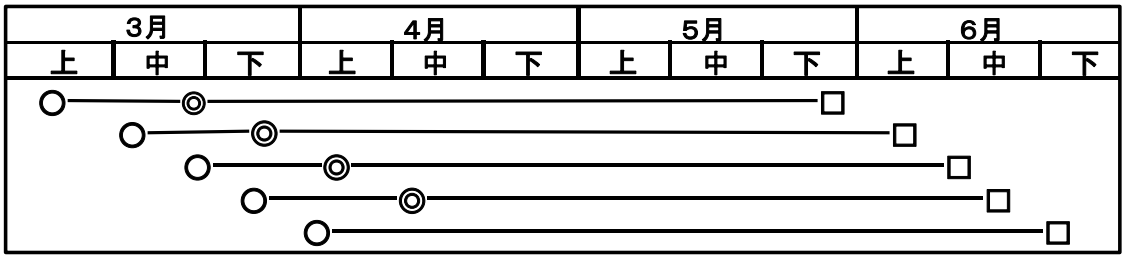
最後に栽培品目の試験販売と売れ行き調査にあたって、多大なご協力を頂きました、「有限会社　三里浜農産」（ふれあいパーク三里浜）に心からお礼申し上げます。

平成１９年８月

スイートコーン（ハウス早熟栽培）

特徴
・イネ科植物なので、他の野菜との輪作がしやすい。
・管理作業は追肥、除穂と省力的である。
・売れ行きが非常に良いので、集客効果が高い。
・ただし、面積当たりの販売額が少ない。

作型



○播種　◎定植　□収穫

品種
キャンベラ 82　（タキイ）
　収穫の目安　播種後 82 日
ゴールドラッシュ　（サカタ）
　播種後 83～84 日
おひさまコーン7　（タキイ）
　播種後 86 日

施肥

肥料名	施肥量(kg/a)
セルカ	8
有機重焼リン	3
あさひ	9
そさい3号	4
(追肥1)そさい3号	3
(追肥2)そさい3号	4

※追肥1は6～7枚時、追肥2は雄穂抽出期

播種
発芽適温が高いので、３月播きは、温床でセルトレイ（72 穴）に１粒ずつ播種し、発芽までは地温 27～28℃で管理する。発芽後は 15～20℃まで徐々に温度を下げる。
マルチ等で地温上昇を図り、最低地温 12～13℃を確保できれば、直播きも可能である。１ヶ所に２～３粒を２cm 程度の深さに播種する。
継続して収穫するなら、同じ品種を３～７日間隔で播種する。異なる品種を同時に播種するときは、イエロー品種の強甘味種タイプを選び、播種後日数の異なる（出穂期の異なる）品種を組み合わせる。

定植
育苗日数約１４日、本葉３枚程度で定植する。
畦幅（天幅＋通路）160～180cm × 株間 30cm の２条植え　（栽植密度 470～410 本／a）
マルチは、透明マルチなど昇温効果のあるものを使う。昇温に加えてアブラムシ忌避効果のあるマルチを利用するのもよい。

管理
直播き（２～３粒播き）した場合は、本葉３枚の時にハサミを使って１本にする。
本葉６～７枚時と、雄穂抽出期に追肥をする。追肥は株間に穴をあけて施肥する。
マルチ栽培では土寄せができず倒伏しやすいので、ヒモを張るなど対策する。
株元の分けつは除去しない。このほうが実の太りがよくなる。
品種によっては２穂目が大きくならないこともあるが、原則として雌穂抽出期に、一番上の雌穂を残し、茎を折らないよう注意してその下の雌穂を除去する。

収穫
絹糸抽出期から２０日を過ぎ、絹糸の先が褐色になったら試し採りをする。雌穂先端の粒が黄色に変わり始めた時が収穫適期。収穫時期が遅れると粒は充実するが、糖度は低下する。できるだけ涼しい朝のうちに収穫する。

病害虫　アブラムシに注意。

その他　発芽適温 30～35℃（最低 10℃程度）、生育適温 22～30℃（35℃以上で高温障害）
種の販売単位：１袋 200 粒、500 粒、2000 粒など

定植（３月）

直播き（４月）

雄穂抽出期・追肥期

雌穂抽出期

除穂

除穂後（ﾔﾝｸﾞ ｺｰﾝ）

収穫期

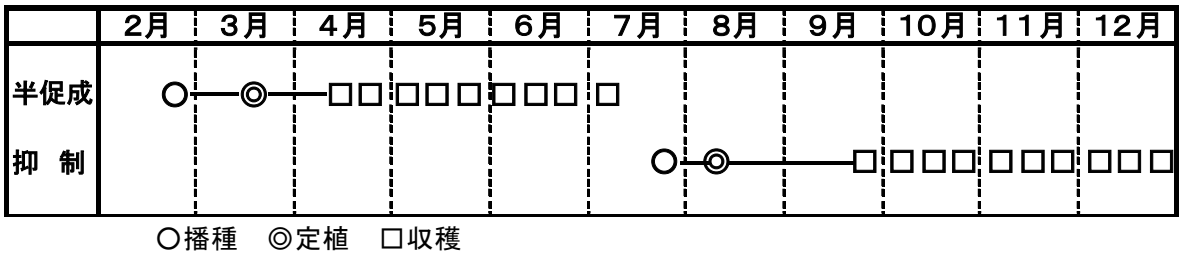
‘ゴールドラッシュ’

‘キャンベラ 82’

ズッキーニ（ハウス半促成・抑制）

特徴　・かぼちゃの仲間。食感はキュウリとナスの間のよう。
・１回の定植で２～３ヶ月出荷可能。半促成と抑制作型で年間６ヶ月出荷可能。
・収穫量も多く、販売額も多い。花ズッキーニで売る方法もある。
・なじみのない野菜なので、食べ方の説明が必要。
・ただし、毎日交配・収穫しなければならない。

作型



品種　ダイナー　（タキイ）緑色種
収量多いが、やや雄花が少ない。
オーラム　（タキイ）黄色種
雄花が多い。
この２品種を混植するとよい。

施肥

肥料名	施肥量(kg/a)
セルカ	10
有機重焼リン	4
油かす	6
固形30号	8
レオユーキ	4
(追肥)そさい3号	1.5kg×４～5回

※追肥は収穫開始期より約2週間毎に施用する。

播種　半促成は、温床で、セルトレイ（72 穴）に１粒播きし、子葉展開～本葉出始め頃 10cm ポットに鉢上げするか、ポットに播種する。抑制は、セルトレイ（50～72 穴）に千鳥状に播種しセル苗を定植するか、直播きする。ただし直播きの場合は、栽培本数の１割程のセル苗を補植用に用意する。

【播種時期の留意点】
低温期には雌花が先に、高温期には雄花が先に着生・開花する。このため、半促成では、雌花のみが開花し（写真「開花始め」）、受粉できないことがある。栽培本数の１割程度を１週間程早く播種、定植しておくことも、雄花を確保する一つの方法である。
一方、抑制では、雌花の開花までに日数がかかることが多い。誘引が大変になるばかりで、管理作業に見合う増収は期待できないので、無理な早播きは避ける。

定植　半促成：播種後２５～３０日、葉数３～４枚
抑制：（セル苗）播種後１週間程度、葉数１枚
畦幅（天幅＋通路）220cm × 株間 80cm の１条植え　（栽植密度 57 本／a）
マルチは、半促成は透明マルチなど昇温効果のあるもの、抑制は白黒ダブルマルチ。

管理　支柱を立てて、雌花を傷つけないよう誘引する。１週間に１～２回の誘引が必要。
誘引のときに腋芽を除去するとよい。オーラムは腋芽の発生が多く伸びやすい。雌花と雄花が揃ったら交配を始める。交配は、日中には花がしぼむので午前中の早い時間に行い、雄花の花粉を雌花の柱頭に受粉させる。カボチャであれば別の品種の花粉をつけても問題はない。もしミツバチがいれば訪花するので交配は必要ない。
追肥は、定期的に行い、株間に穴をあけて施肥する。

収穫　長さ 15～20cm 程度（高温期は交配後約４日、低温期は約８日）で収穫する。大きくなると種が大きくなり食感が悪くなるとともに、株に負担がかかるので、適期収穫を心がける。

病害虫　アブラムシとうどんこ病に注意。

その他　発芽適温 25～30℃、生育適温 18～25℃。
種の販売単位：１袋 100 粒

‘ダイナー’　‘オーラム’

半促成 定植後（３月）

開花始め（４月）

雄花（左）と雌花（右）

開花・肥大期・収穫前

生育後期（６月末）

抑制 直播き（７月）

本葉展開始め

抑制 本葉展開

茎ブロッコリー（秋作）

特徴　・主に茎を食べるブロッコリー。
・ハウス栽培なら、１回の定植で約４ヶ月の継続出荷が可能。（収穫は週２回程度）
・３月上旬播種の春作では、５月末～６月末の１ヶ月間収穫できるが、収量が少ない。

作型

７月	８月	９月	１０月	１１月	１２月	１月	２月
○	◎	――	――	□□□	□□□	□□□	□□□	□

○播種　◎定植　□収穫

品種　スリム　（ナコス）
収穫花蕾が多く、多収
スティックセニョール　（サカタ）
グリーンボイス　（タキイ）

施肥

肥料名	施肥量(kg/a)
セルカ	１０
ようりん	４
あさひ	８
そさい3号	２
(追肥)そさい3号	2kg×3～４回

※追肥は主枝摘蕾より1か月毎に施用する。

播種　セルトレイ（128 穴）に１～２粒播きする。子葉展開時に１本にする。

定植　畦幅（天幅＋通路）180cm × 株間 50cm の２条植え　（栽植密度 220 本／a）
マルチは、白黒ダブルマルチか黒マルチを利用する。

管理　主枝の頂花蕾が５００円玉程度に育った時点で、頂花蕾のみを除去する。摘蕾後、１回目の追肥をする。追肥は、株間に穴をあけて施肥する。
一次側枝の収穫終了後に、２回目の追肥をする。
葉が混み合わないよう、適宜、葉や茎の間引きを行う。

収穫　側枝が 15～18cm になったら収穫を開始する。蕾が充実し開花する前のものを収穫する。
長さ 20cm 以上に伸びた側枝では、基部の葉を１～２枚残して収穫し、そこから出る側枝（二次側枝）も順次収穫する。二次側枝の基部から、三次側枝も収穫できる。
株元から勢いの強い（太い）側枝が発生することがある。これは茎が太すぎて商品には適さないが、主枝と同じような管理（花蕾を浅めに収穫）をして、二次側枝以降の収穫本数確保につなげることができる。

調製　茎の下の部分はゆでても硬いので、調製は、適当な柔らかさの長さまでで切る。
葉を除去し、太さや長さのそろったものを束にする。
太さをそろえると、ゆで上がりまでの時間が同じになるので、調理しやすい。

病害虫　アブラムシ、ヨトウムシに注意。

その他　発芽適温 25℃前後、生育適温 15～20℃（5℃以下の低温、25℃以上の高温で生育遅延）
種の販売単位：20ml 袋か 1ml 袋（1ml で 100～120 粒）

定植
（７月下旬～８月上旬）

出蕾前

主枝の頂花蕾
（９月下旬～１０月上旬）

頂花蕾の摘蕾

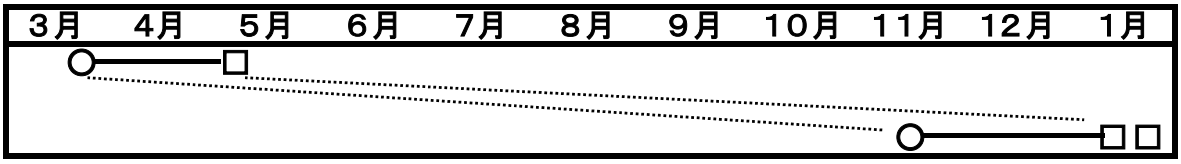
一次側枝の収穫
（１０月上中旬～）

二次側枝の収穫
（１１月下旬～）

ミニチンゲンサイ

特徴　・草丈１５ｃｍ程度のチンゲンサイ。
・播種後３０日～６０日で収穫。収穫が遅れても草丈が伸びすぎないので、収穫適期幅が広くてロスが少ない。
・細かく切らなくても、そのまま炒め物などに使える。

作型



○播種　□収穫

品種　シャオパオ（旧 クーニャン）
（サカタ）

施肥

肥料名	施肥量(kg/a)
セルカ	10
重焼リン	3
あさひ	8

播種　条間 20cm × 株間 5cm で１粒播き　（栽植密度 10,000 本／a）

管理　播種後からしばらくは、土の表面が乾かないようにかん水をする。
ある程度の大きさになってからはかん水を控えるほうが、土がつかず調製がしやすくなる。
高温期は徒長しやすいので、やや粗植にし、かん水しすぎないようにする。
冬まき春収穫（12～2 月播き）は、抽台の心配があるので、トンネルなどで保温する。

収穫　株（尻）が張ってきたら、収穫を開始する。

調製　株元の古葉を除去し、袋詰めする。

病害虫　コナガ、アオムシ、アブラムシなどに注意。

その他　発芽適温 20～25℃（最低 5℃、最高 35℃）、
生育適温 15～25℃（5℃以下で生育遅延、3℃以下で低温障害　夜間の生育適温 8～10℃）
種の単位：3ml 袋か 20ml 袋（20ml で 4500～5000 粒）5000 粒ペレット種子もある。

‘シャオパオ’

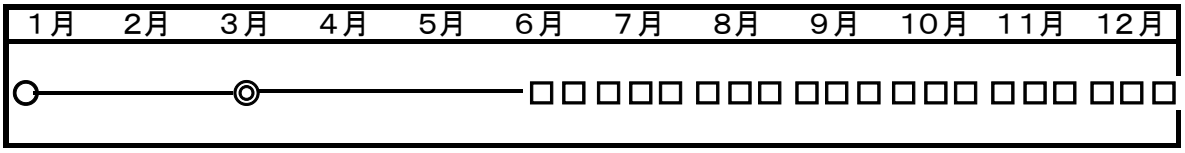
播種～発芽

収穫前

パプリカ（ハウス栽培）

特徴　・市販のパプリカはほとんど外国産なので、よく売れる。
・３月定植の場合、収穫期は６月中旬～１２月下旬の６ヶ月間と長い。
・生育速度が他の果菜類に比べ遅いので、誘引、整枝の作業も比較的省力的。
・ただし、ハウス栽培が原則で、夏期の高温時に遮光等の対策が必須である。

作型



○播種　◎定植　□収穫

品種
フェラーリ　（ENZA）赤色種
スペシャル　（ENZA）赤色種
コンフェティ　（ENZA）黄色種
フェアウェイ　（ENZA）黄色種
ブギ　（RIJK ZWAAN）橙色種
など

施肥

肥料名	施肥量(kg/a)
セルカ	10
有機重焼リン	4
油かす	8
レオユーキ	20
＜追肥＞	
液肥OK-F-1など	9

※追肥は収穫開始期より2週間毎に、0.5kgを施用する。

播種　１～２月播種。セルトレイ（72 穴）に１粒播きし、本葉１.５枚程度の頃に 12cm ポットに鉢上げする。

定植　育苗日数 60～70 日、第１番花開花期頃
畦幅（天幅＋通路）230cm × 株間 30cm の１条植え２本仕立て　（栽植密度 140 本／a）
最初の分枝の向きを、誘引する方向にして定植する。

温度管理　定植後は保温のためトンネルをする。設備があれば暖房も行うとよい。
日中は 28℃以下を目安にかん気する。マルチは、定植時は透明マルチなど昇温効果のあるものを張り、夏期（梅雨明け～９月）にはその上に白黒ダブルかシルバーマルチをかぶせる。夏期（７月～８月）は、遮光ネットを張り（できれば 11～15 時頃の時間遮光がよい）、日焼け果等の障害果の発生を抑制する。

整枝方法　第１花の節の分枝を利用した２本仕立てとし、それ以下の側枝は除去する。
草勢を確保するため、摘花、側枝摘心を行う。

【摘花】第１花とそれぞれの主枝の第２～３花を摘花する（図１）。第４～５花はそのまま着果させ、第６～７花を摘花、第８花以降は各節に着果させる。変形果や尻腐れ果は見つけ次第除去する。着果が多すぎると生長点が止まってしまい、伸長しなくなるので、徹底する。

【側枝摘心】それぞれの主枝において、各節から出る側枝は全て、葉３枚を残して先の花と生長点を摘み取る（図２）。
主枝上の果実のみを１節に１果収穫するのが基本だが、主枝上の着果すべき花が落花してしまった場合などは、その節の側枝に１果のみ着果させてもよい（図２）。

【誘引】畦の上に番線をはり、誘引ひもで主枝を誘引する。

【不定芽の利用】下位節から発生する不定芽を伸ばして着果させた果実は、直射日光に当たりにくく、生育中期～後期に品質の高いものが収穫できる。ただし、株への負担を考慮して、１本当たり１～２個までとする（写真「収穫期 後期」の下の果実）。

管理　かん水不足は尻腐れ果やしわ果など果実障害を誘発するので、こまめにかん水を行う。かん水不足による茎葉のしおれ症状はわかりにくいが、葉が裏返ることが多い。
追肥は、着果負担が大きくなる収穫開始期より定期的に行う。栽培期間が長いため、液肥混入機を利用した液肥施用を２週間ごとに行うのがよいが、粒状肥料の穴肥やマルチをめくった施肥を月１回程度行ってもよい。

収穫　果実の緑色がなくなったら収穫する。開花から収穫までの日数は収穫開始期で７０日、収穫中期で５０日ほどかかる。

病害虫　アブラムシ、アザミウマ、ハダニ、オオタバコガ、うどんこ病、灰色かび病など。

その他　発芽適温 30℃（20℃以下では発芽が極端に遅れる）
生育適温 日中 23～28℃、夜間 13～18℃
種の単位：100 粒／袋

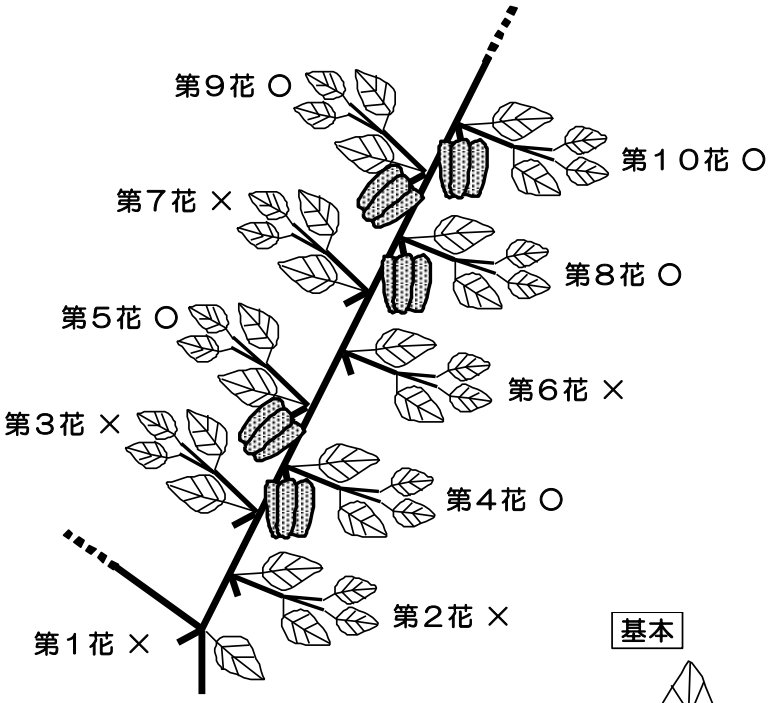


図１ 整枝・摘果(花)の方法

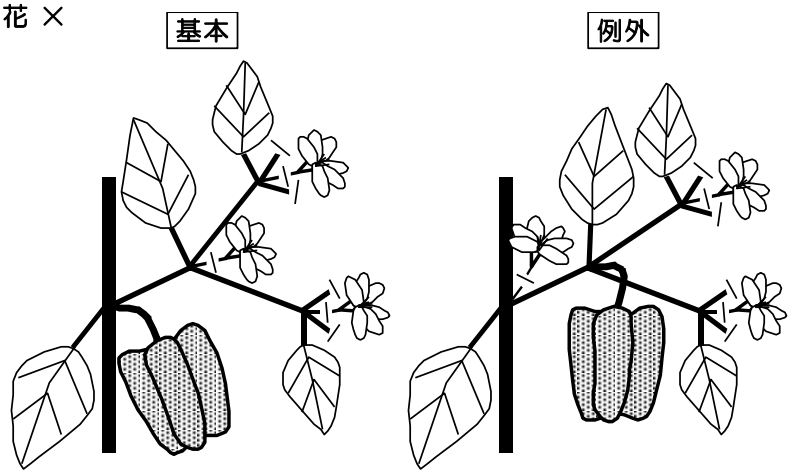


図2 側枝の処理

‘フェラーリ’
（１２月）

‘コンフェティ’
（１２月）

‘ブギ’
（１２月）

定植（３月上中旬）

（６月上中旬）

収穫開始
（６月下旬）

収穫期 中期

収穫期 後期

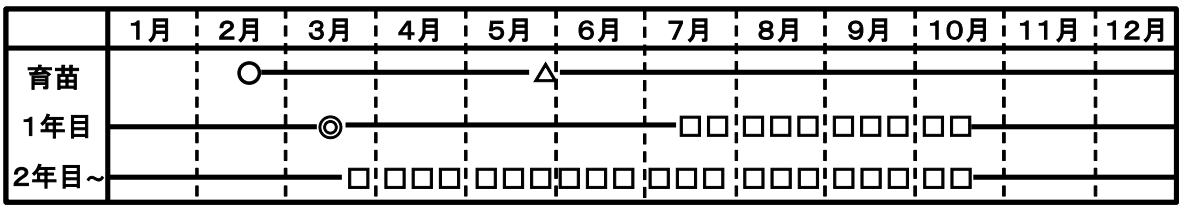
収穫

袋詰め後

アスパラガス（ハウス栽培）

特徴
・定植１年目から、約３ヶ月間（７月中旬～１０月中旬）収穫できる。
・定植２年目以降は、約７ヶ月間の継続収穫が可能。
・ハウス栽培では、約１０年間収穫が可能で、収量は４～６年目が最も多い。
・ただし、毎日収穫しなければならない。

作型



○播種　△仮植　◎定植　□収穫

品種
スーパーウェルカム（サカタ）
グリーンタワー（みかど協和）
バーガンディ（ｼﾝｼﾞｪﾝﾀ）紫種

播種
セルトレイ（72 穴）に播種する。

育苗
露地でマルチをして定植する。
株間 30cm 条間 50cm ２条植え
または 10.5cm ロングポットに鉢上げする。
冬、茎葉が黄化後、茎葉を刈り取る。

施肥

施肥量(kg/a)		1年目		2年目	
肥料名	施肥位置	元肥	追肥	元肥	追肥
堆肥	全層	1000			
苦土石灰	全層	30			
ようりん	全層	15			
あさひ	表層	33			
エコロング424	表層	16			
〃	表面		15	16	15

※ エコロング424には140日と180日タイプがある。
早めに施用するときは180日、遅れたら140日。
３年目以降堆肥を施用する。

定植
畦幅 250～300cm×株間 30cm、条間 80～90cm の２条植え（栽植密度 260～220 本／a）、または、畦幅（天幅＋通路）125～160cm × 株間 30cm の１条植え（図参照）
芽が動き出さない３月に育苗畑から株を掘り上げ、定植までに株が乾かないようにする。
植え位置に溝を掘って定植し、かん水チューブを設置後、乾燥防止と雑草対策として、通路と畦の肩部にアグリシートなどのマルチをする（図参照）。

１年目の管理　定植１年目は株を育成するため、春に出てきた芽は収穫せず、１株当たり５～８本を立茎させる。アスパラガスは乾燥に弱く、乾燥すると先が曲がり、伸びが悪くなるのでかん水管理には注意する。茎の倒伏防止のため、フラワーネットやヒモを張る。フラワーネットなら、40cm と 100cm の高さに２段設置する。立茎株は、120cm 位で芯を止め、刈り込みバサミ等で生垣仕立てのように徐々に側枝の茎葉を刈り込み、光がまんべんに畦間にもあたるようにする。

７月以降に出てきた芽は収穫できる。７月下旬に追肥を施用する。

１１月以降はハウスを積極的にかん気して茎葉の黄化を促す。茎葉が８割以上黄化したら、地際で刈り取る。病害対策のため刈り取った茎葉は圃場外に持ち出し焼却する。マルチ等を除去した後、畦の表面をバーナーなどで焼くと、病害虫の防除と雑草防止になる。その後ハウスのビニールを巻き上げるか、除去する。

２年目以降の管理　３月にハウスビニールを被覆し、堆肥散布、施肥、かん水チューブ、マルチ等を設置したら、ハウスの保温を開始する。出てきた芽を収穫する。

収穫開始から３０日程たって、霜の恐れがなくなったら、立茎を開始する。立茎は太さ10mm 程度のまっすぐ伸びた茎を収穫せずに間隔をとって５～６本／株を立てる。その他の茎（太い・細い・曲がり）は随時収穫する。太い茎は側枝が高い位置からしか伸びないため、立茎には向かない。立茎が早いと収量が減り、遅いと細い茎しか出なくなり夏芽の収量と翌年に影響するので注意する。立茎の管理は定植１年目に準じる。

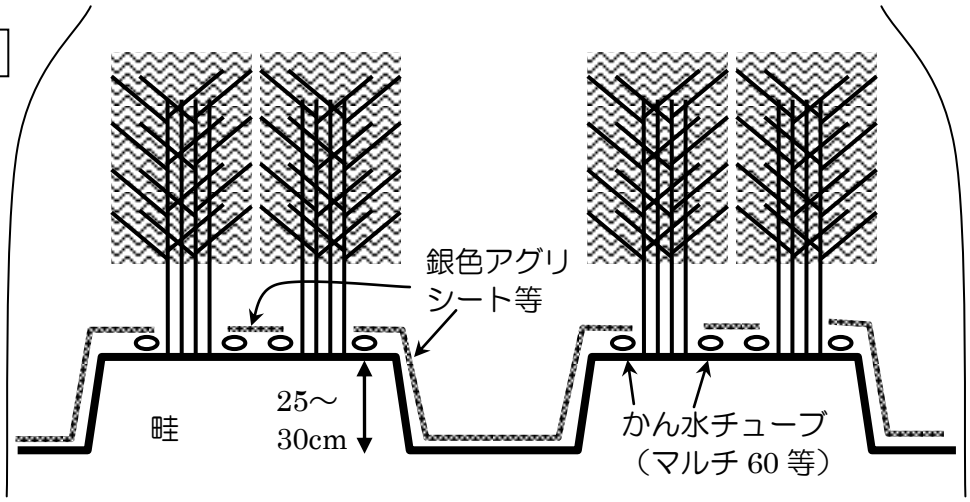
６月以降、立茎完了後に出てきた夏芽は生育が早いので、長くならないよう収穫する。
７月下旬に追肥をする。１１月以降の管理は、定植１年目に準じる。

調製　長さ 25cm で切りそろえ、太さをそろえて束にする。立てて保管すると曲がりにくい。

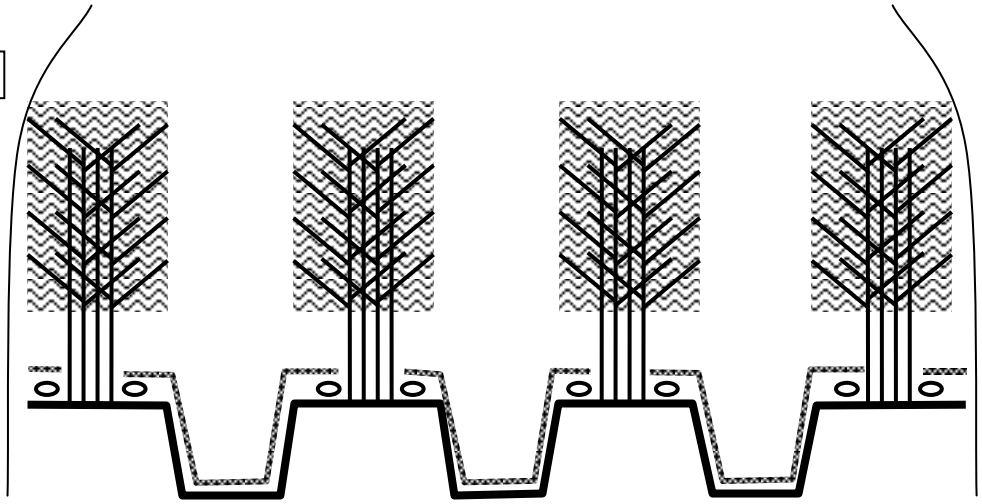
病害虫　病害は斑点病と茎枯病、灰色かび病。害虫はアザミウマ、ヨトウムシ、ジュウシホシクビナガハムシなどに注意。

その他　発芽適温 25～30℃（20℃以下では発芽までの日数が長くなる）
萌芽開始温度 5℃前後、茎葉の伸長適温 10～30℃、光合成適温 15～20℃
種の単位：20ml で 600～800 粒

２条植え

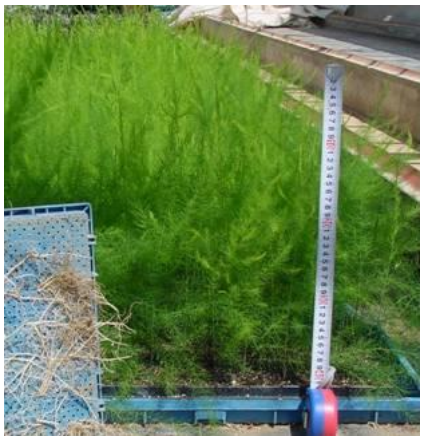


１条植え



乾燥防止とハウスの利用の上から、「２条植え」が良い。

育苗



セル育苗

ロングポット育苗（８月）

露地育苗（１２月）

定植１年目

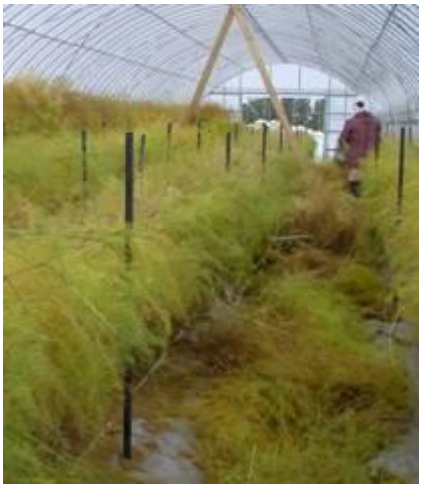
立茎始期（４月下旬）

（５月中旬）

収穫開始（７月中旬）

（８月下旬）

（８月下旬）

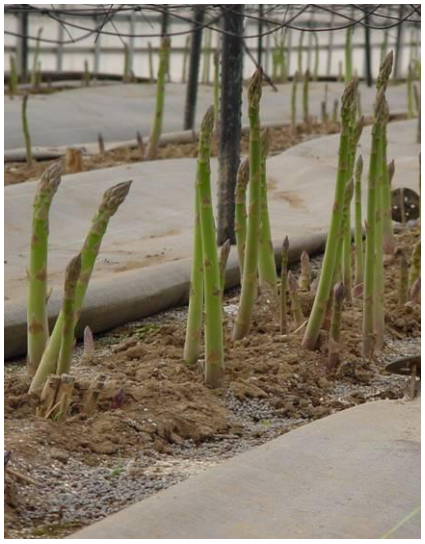


茎葉の刈り取り（１２月）

茎葉の刈り取り（１２月）

定植２年目以降

保温・春芽萌芽（３月）



春芽収穫（３月）

夏芽収穫（７月）

スーパーウェルカム

グリーンタワー

バーガンディ

新規野菜の栽培のポイント

○作付計画が重要

これら新規野菜は、トマトやキュウリといった主要野菜と違い、多くの消費は望めず、JA 系統・卸売市場を通じた流通も期待できない。

直売所での販売や直接販売が中心となると思われるが、重要なことは作り過ぎないことである。特に、ズッキーニやミニチンゲンサイは、予想以上に収穫量が多いので注意する。

パプリカやアスパラガスは、販路さえ確保できれば、ハウス単位で栽培するほうが管理が容易で効率的である。

○長期間の継続収穫のための工夫

スイートコーンやミニチンゲンサイは、段播きをする。

スイートコーンは露地と組み合わせることで、より長く収穫できる。

栽培期間の長い作物は、適期追肥や適期防除をすることで草勢の維持が図られ、安定的に収穫できる。

スイートコーン、ズッキーニは、育苗に加温設備があると早いうちから苗を用意でき、栽培期間を長くすることができる。またパプリカの育苗に加温設備は必須である。

○病害虫防除

これらの新規野菜はマイナー野菜のため、適用のある農薬が少なく、病害虫の発生を少なくする工夫が必要である。例えば、ハウスのサイドと出入り口に防虫ネットを張って害虫の侵入を防止したり、病害が出ないよう日ごろからかん気をよくしたり、作付けの際は輪作するなどである。草勢を適切に維持することも、病気への抵抗力といった面から重要なことである。

また、農薬を散布する時は、他の作物へ薬剤の飛散がないようにするため、あらかじめ通路を広めに取っておき、他の作物との間にビニールや板で壁を用意して、風のない日に行うなど工夫する。

スイートコーンを除く品目には、「野菜類」に適用のある農薬を使用することができる。アブラムシ類やハダニ類、うどんこ病などに効果のある薬剤があるが、どの薬剤も発生初期の防除が重要であり、多発してからではあまり効果が期待できないので注意する。日頃から、病害虫の発生を観察することが重要である。

○食べ方の紹介

ズッキーニやパプリカなどは、普段から食べなれていないので、消費者は商品になかなか手がのびない。調理例や栄養価を紹介する POP や持ち帰られるレシピ、口頭説明が重要である。このような工夫は他の品目においても有効である。

なお、商品の近くにつける POP 表示は、できるだけ３秒以内で読める内容で、３行以内で、読みやすい文字の大きさにすることを心がける。印刷よりも手書きのほうがよい。

（例）ズッキーニ

低カロリー野菜 輪切りにして 炒めたり 煮込んだり

アスパラガス

朝採り新鮮 お弁当のおかずに

新規野菜の防除

これらの品目はマイナー野菜であるため、病害虫防除の農薬は、適用拡大や登録内容の変更が頻繁に行われる。そのため、農薬使用に当たっては、新しい情報を確認してから使用すること。

農薬の登録内容は平成１９年７月現在のもの

スイートコーン

農薬は、「とうもろこし」に適用のある農薬が使える。野菜類でないので注意。

アブラムシに注意。

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	適用病害虫
オルトラン水和剤	1000 倍	収穫７日前まで	２回以内	アブラムシ類
アグロスリン乳剤	1000～2000 倍	収穫７日前まで	３回以内	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類･ｱﾜﾖﾄｳ･ｱﾜﾉﾒｲｶﾞ
モスピラン水溶剤	2000～4000 倍	収穫１４日前まで	３回以内	アブラムシ類

ズッキーニ

農薬は、「ズッキーニ」か「野菜類」に適用のある農薬が使える。

アブラムシとうどんこ病に注意。

ズッキーニの葉には白い斑点があるのが普通で、うどんこ病の初発を見逃さないように。

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	適用病害虫
ダコニール 1000	1000 倍	収穫前日まで	３回以内	うどんこ病
トップジン M 水和剤	1500 倍	収穫前日まで	３回以内	うどんこ病
アミスター20 フロアブル	2000 倍	収穫前日まで	４回以内	うどんこ病 （高温時薬害注意）
チェス水和剤	2000 倍	収穫前日まで	２回以内	アブラムシ類
アディオン乳剤	2000～3000 倍	収穫７日前まで	３回以内	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類・ﾌｷﾉﾒｲｶﾞ
アファーム乳剤	2000 倍	収穫３日前まで	２回以内	オオタバコガ

茎ブロッコリー

農薬は、「茎ブロッコリー」か「野菜類」に適用のある農薬が使える。

農薬の適用では「ブロッコリー」とは別扱いなので注意が必要。使える農薬は少ない。

アブラムシ、ヨトウムシに注意。

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	適用病害虫
コテツフロアブル	2000 倍	収穫前日まで	２回以内	アオムシ
モスピラン水溶剤	4000 倍	収穫前日まで	２回以内	アブラムシ類
（野菜類）BT 水和剤 ガードジェット水和剤、エスマルク DF、トアローフロアブル CT など		発生初期、但し収穫前日まで	BT 水和剤合計で４回以内	オオタバコガ・コナガ・アオムシ・ヨトウムシなど

ミニチンゲンサイ

農薬は、「チンゲンサイ」か「非結球あぶらな科葉菜類」か「野菜類」に適用のある農薬が使える。コナガ、アオムシ、アブラムシなどに注意。

薬剤名	希釈倍率（使用量）	使用時期	使用回数	適用病害虫
ジェイエース粒剤	6kg/10a	定植時（作条散布後土壌混和）	１回	アブラムシ類
アファーム乳剤	1000～2000 倍	収穫３日前まで	３回以内	コナガ・アオムシ
アグロスリン乳剤	2000 倍	収穫前日まで	２回以内	アオムシ・アブラムシ類
カスケード乳剤	2000 倍	収穫７日前まで	２回以内	ｺﾅｶﾞ ・ｱｵﾑｼ・ﾏﾒﾊﾓｸﾞﾘﾊﾞｴ

パプリカ

農薬は、「ピーマン」か「野菜類」に適用のある農薬が使える。比較的種類が多い。
アブラムシ、アザミウマ、ハダニ、オオタバコガ、うどんこ病、灰色かび病など。

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	適用病害虫
チェス水和剤	3000 倍	収穫前日まで	３回以内	アブラムシ類
アディオン乳剤	2000～3000 倍	収穫前日まで	５回以内	アブラムシ類・タバコガ
ロディー乳剤	2000 倍	収穫前日まで	３回以内	アブラムシ類・ハダニ類
ダコニール 1000	1000 倍	収穫前日まで	３回以内	うどんこ病・斑点病
ロブラール水和剤	1000～1500 倍	収穫前日まで	４回以内	灰色かび病・菌核病

アスパラガス

農薬は、「アスパラガス」か「野菜類」に適用のある農薬が使える。
病害は、斑点病と茎枯病の予防が重要で、灰色かび病も注意。害虫は、アザミウマ、ヨトウムシ、ジュウシホシクビナガハムシなどに注意。

薬剤名	希釈倍率等	使用時期	使用回数	適用病害虫
ダコニール 1000	1000 倍	収穫前日まで	３回以内	褐斑病・茎枯病・斑点病
ストロビーフロアブル	2000 倍	収穫前日まで	３回以内	斑点病
トリフミン水和剤	1000 倍 3L／1 ㎡灌注	収穫７日前まで	１回	立枯病
アディオン乳剤	2000～3000 倍	収穫前日まで	３回以内	ﾖﾄｳﾑｼ・ｱﾌﾞﾗﾑｼ・ｼﾞｭｳｼﾎｼｸﾋﾞﾅｶﾞﾊﾑｼ
アファーム乳剤	2000 倍	収穫前日まで	２回以内	ｵｵﾀﾊﾞｺｶﾞ ・ﾖﾄｳﾑｼ・ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ
スピノエース顆粒水和剤	5000 倍	収穫前日まで	２回以内	アザミウマ類